

<基調講演：ビデオメッセージ>

スラヴチチ・テクノエコポリス

——環境・経済・社会の復興と持続的発展への道



スラヴチチ市長 ウラジーミル・ウドビチェンコ

- ・チェルノブイリ原発の事故により、500万人以上が被災し、このうち260万人がウクライナの住民であった。
- ・1986年4月27日、チェルノブイリ原子力発電所周辺地域から10万人以上の住民が避難させられました。現在この地域は、30km立ち入り禁止区域となっている。
- ・同年、チェルノブイリ発電所（1～3号機）については、発電を再開するという決定がなされ、11月30日、事故のあった4号機を覆う「石棺」の建造が終了した。
- ・同年、10月14日、発電所の再稼働をまえに、発電所の町「プリピャチ」に代わる従業員のためのあらたな町「スラヴチチ」建設が始まった。
- ・これは、当時のソ連邦全土をあげての建設となり、スラヴチチには49の民族の出身者が、一つの家族のように仲よく暮らしている。
- ・スラヴチチにとって最初の大きな課題は、除染作業でした。スラヴチチに住むかどうか、また、発電所周辺から避難した人たちがここに戻って暮らすかどうか、自分たちで決めることができるように、情報提供が行われた。
- ・まず表土の除去などによる土壌の除染、そして、放射能レベルが高い場合には、樹木の表面の除染も行い、十分に許容できるレベルの環境を確保した。
- ・スラヴチチは、いまなお、第4ゾーン、放射能管理強化地域である。「チェルノブイリ被災者のステータスについて」という法律が採択されており、このなかで、第4ゾーンには、2,000以上の町や村が指定されている。
- ・1995年、ウクライナ政府は、G7、EUとの間でメモランダムを調印、チェルノブイリ発電所の閉鎖を約束した。当時、ソ連邦各地の原子力発電所や関連施設からチェルノブイリの運転継続のためにスラヴチチに移ってきた人たちにとっては思いがけないことであり、チェルノブイリ閉鎖は大きな痛手となった。
- ・2000年12月15日、発電所の閉鎖とともに、1,500以上の人がスラヴチチを去った。これは、スラヴチチの共同体の崩壊でもあったが、これを乗り越え、発展への道をたどってきた。
- ・私たちのこの経験が、日本の、そして、福島のみなさまのお役にたつかもしいないと思うため、順にご紹介していきたい。



- ・まず必要だったのは、「住民のこころをひとつにする目標、その目標達成に、住民の努力を結集していくこと」であった。自分たちの町が、住み続ける価値ある町になっていくということを信じさせるような目標である。
- ・政府の財政も余裕はなかったが、チェルノブイリ被災者への配慮を忘れなかった。しかし、国がどんなに頑張っても、住民に、自分たち自身で何かを変えていこうとする気持ちがなくて前進はありえない。
- ・スラヴチチ市民はチェルノブイリ原子力発電所の閉鎖、厳しい経済状況、あらゆる改革とそれにとまなう困難を乗り越えてきた。
- ・私たちは、スラヴチチのあらたな発展のための法基盤づくりに着手し、「スラヴチチの発展」と題する必要な町の条例を作った。そこには、私たちが長期にわたり国にはたらかかけ、獲得してきた成果が集められている。
- ・ウクライナのフォーカスという雑誌では、毎年「ウクライナの住みやすい町 55」を取り上げ、スラヴチチは、人口 2 万 5000 の小さな町であるが、常にトップ 10 に入り、生活レベル・生活の質で、常にトップクラスにランクされている。
- ・ここに至るまでには、もちろん長いみちのりがあった。市としても、大変な努力をしてきたが、なによりも、住民は、自分たちの町を信じ、そのことが、私たちが力をあわせて前進するのを助けてくれた。
- ・もう一つの目標は、「子供や若い世代を大切に作る町づくり」であり、町の施設やインフラに反映されている。
- ・スラヴチチの行政、住民、企業、組織は力をあわせ、レベルの高い、現代的な要求を満たす生活の場をつくりだすための努力を重ねている。
- ・スラヴチチは、1999 年から、経済特区プロジェクトを推進して、1,000 以上の新たな雇用を生み出し、最新の技術の導入にも成功してきた。
- ・中小企業支援のための制度も整えたり、企業設立を支援してきたりし、ウクライナの企業活動促進の歴史をリードしてきた。また、雇用の増大にも貢献している。
- ・スラヴチチは、原子力発電所だけに頼る産業構造の脱却を目指している。現在では、チェルノブイリ発電所からの税収は、町の予算の 50% 未満である。
- ・社会インフラの整備にも力をいれており、幼稚園や学校に加え、高校、大学も設置した。住民の生活水準向上に役立つとともに、町の競争力も高めている。
- ・自治体の民主主義向上プロジェクトにより、地域共同体における行政と住民とのあらたな相互関係づくりに役立っている。
- ・また、スラヴチチでは、使用言語をめぐる軋轢はなく、若い世代は、国の言語としてのウクライナ語のほか、ロシア語、英語、フランス語、ドイツ語、その他の言語を選択して学ぶことができる。
- ・最後に、チェルノブイリや福島での事故は、一つの国の力だけで対処できるものではなく、世界の文明が力を合わせて乗り越えていかないといけない。私たちは、一つの世界、一つの世界文明の中で生きていくことを学ばなくてはならない。力をあわせ、さまざまな問題を乗り越えていこう。

以上